

第10回京都駅前健康セミナー風景

日下部先生



甲状腺外来：
第2・4金曜午後
糖尿病・肥満外来：
第1・2・5土曜午前

堀井院長



内科一般・循環器・
糖尿病外来：
月火水金土

園山先生

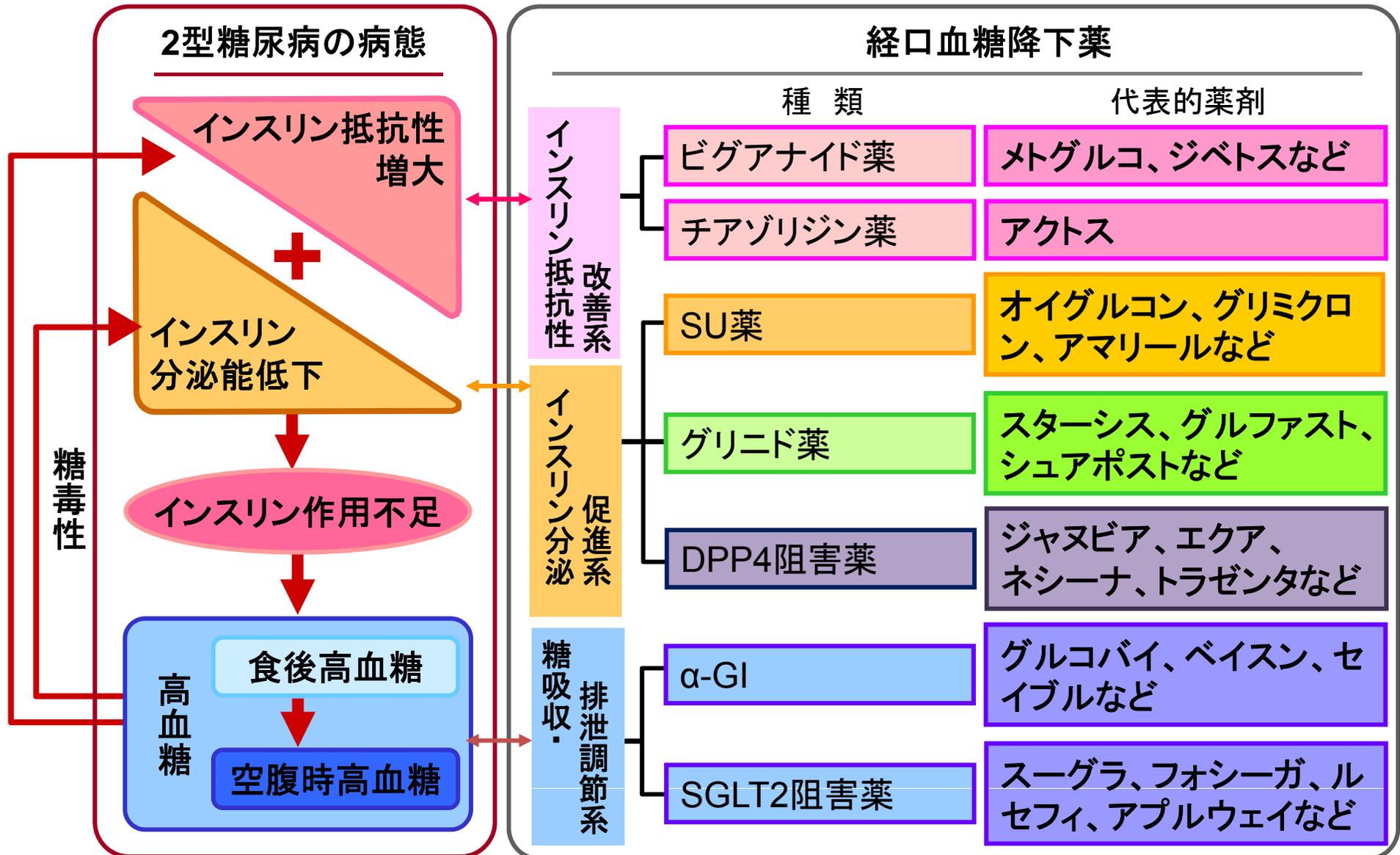


内分泌・糖尿病外来
第2・4水曜午前



種々の経口血糖降下薬

京都駅前健康セミナー H26/12/09 日下部担当



甲状腺疾患

～甲状腺機能異常を中心に～

担当 園山 拓洋

① 甲状腺って？

のどの下の方にある15-20g程度の小さな臓器で、「**甲状腺ホルモン**」を産生・分泌するのが主な仕事です。甲状腺ホルモンは血流に乗って全身を巡り、**代謝を活発にして体を元気にします**。

甲状腺ホルモンがちょうどよい量になるように、脳の一部である視床下部や下垂体が甲状腺の制御を行っています。

② 甲状腺機能異常とは

血液の中の甲状腺ホルモンが少なすぎたり多すぎたりすることを、甲状腺機能異常といいます。**甲状腺ホルモンが少ない状態を「甲状腺機能低下症」、多すぎる状態を「甲状腺中毒症」と**いいます。

甲状腺機能異常があるかどうかは、**血液検査で甲状腺ホルモン(free T4とfree T3)の量や、下垂体が分泌する甲状腺刺激ホルモン(TSH)の量を測る**ことで調べます。

甲状腺機能低下症では甲状腺ホルモンの量が少なくなり、TSHの量は多くなります。

逆に、甲状腺中毒症では甲状腺ホルモンの量が多くなり、TSHの量は少なくなります。

③ 甲状腺機能低下症

体を活性化する甲状腺ホルモンが少ないと元気がなくなり

脈が遅い、寒さに弱い、疲れやすい、むくみ、皮膚の乾燥、便秘、認知機能異常、動作緩慢というような症状が出ます。

とくに**中年以上の女性で多く**(40-50人に1人)、原因としては**橋本病**が最も多いです。

甲状腺ホルモン製剤を飲むことで治療します。

④ 甲状腺中毒症

甲状腺ホルモンが多すぎるので、体が元気になりすぎ、

脈が速い、暑さに弱い、汗の量が多い、食べても太らない、手が震える、イライラ、下痢のような症状が出ます。

20-40代の女性に発症することが多く、原因としては**バセドウ病**が最も多いです。

バセドウ病には、このほかにも甲状腺が腫れる、眼が出てくる、などの症状があります。

治療は、原因となっている病気によって異なりますが、バセドウ病では、まずは甲状腺ホルモンの産生を抑える薬をためし、薬で治療するのが難しい場合にほかの治療(アイソトープ治療、手術)を行うのが一般的です。

1) 要注意の3つの要因

- a) 動脈硬化(粥状硬化)：血管の脆弱化、プラークの破裂
- b) 温度差、ヒートショック：血圧の乱高下が危険。
- c) 早朝高血圧：血圧の上昇が冬に著しい。

2) 冬に多くなる疾患：

- 脳出血：a)b)c)
- 脳梗塞(脳血栓)、心筋梗塞：a)b)c)
- クモ膜下出血：b)c)

3) 急性冠症候群(ACS)、急性脳血管症候群(ACVS)

- 冠動脈あるいは脳血管でプラークが破裂を繰り返している状態。
- 冠動脈では不安定狭心症、心筋梗塞
- 脳血管では一過性脳虚血発作(TIA)、脳血栓(脳梗塞)
- TIAは、脳血管がつまりかけて(脳血栓)、すぐ再開通した状態。その後脳梗塞に短時間で移行しやすい危険状態。

4) これらの疾患にならないためには

- 高血圧、高血糖、高脂質、タバコが動脈硬化の誘因。
- 食事で、量・塩分・脂質・糖分、アルコールを控え、体力に見合った、適当な運動
- ヒートショックに注意。脱衣場、トイレを暖かく。

